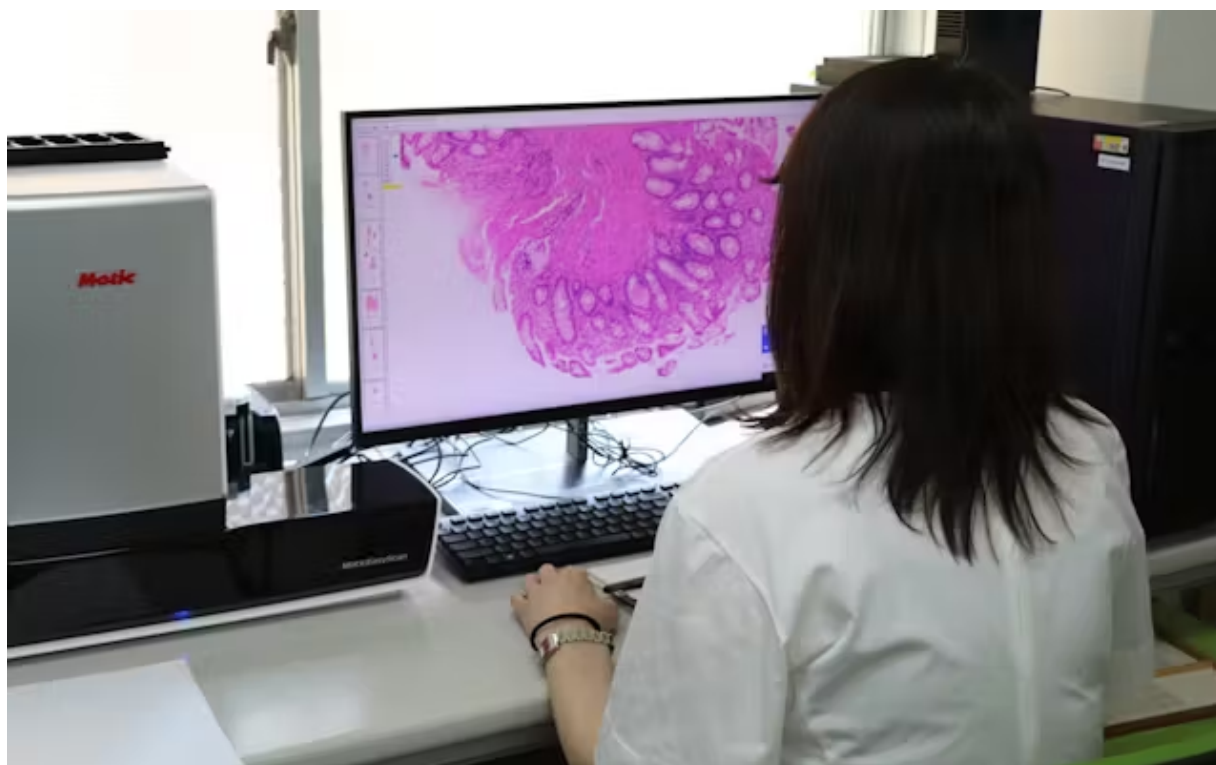


病理診断、AIで早く確実に 長崎大学・九州大学発のスタートアップ

[医薬品・医療介護](#)[フォローする](#)

2025年6月13日 5:00 [会員限定記事]

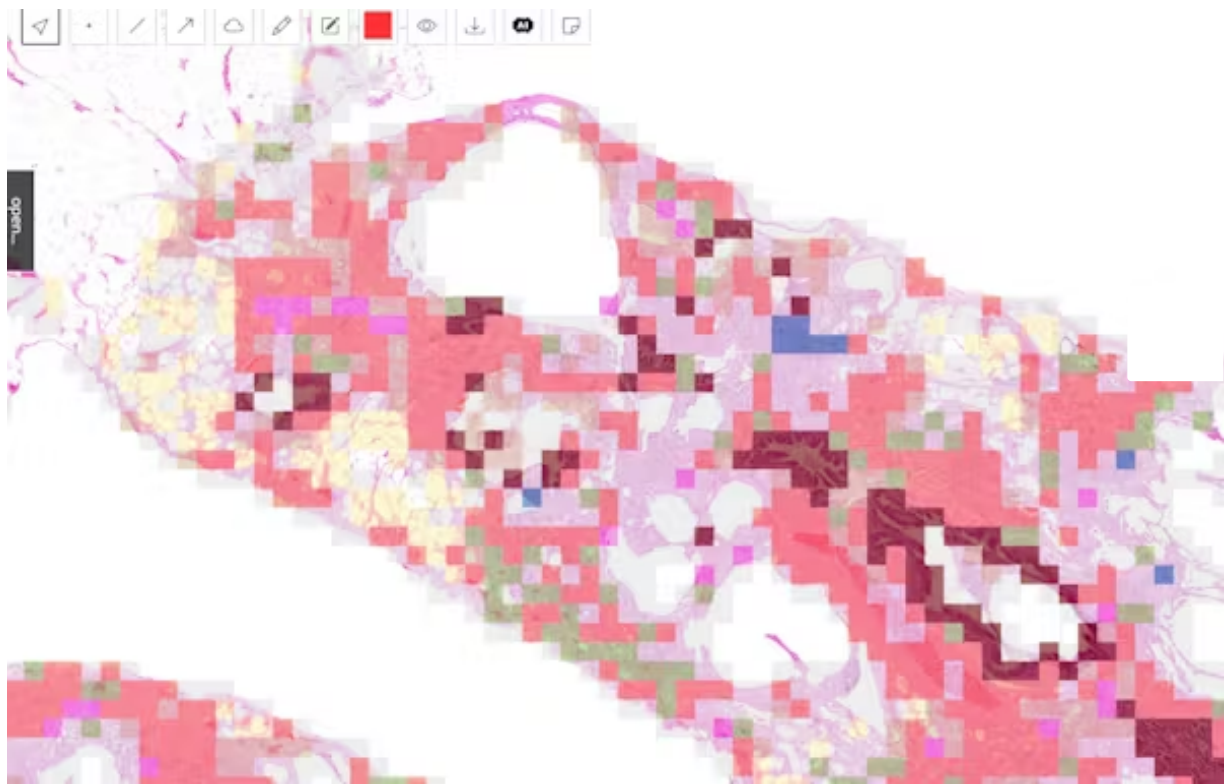
保存



人間の目による病理診断にAIを併用すれば、精度や効率を高めることができる

九州の大学発スタートアップが病理診断用の人工知能（AI）開発を進めている。長崎大学発のエヌラボ（長崎市）と同大学は、間質性肺炎の早期診断を助けるAIを共同開発。九州大学発のメドメイン（福岡市）も病理診断用AIの薬事承認申請を準備中だ。医学部には専門性の高い研究者や技術が集まる。大学発新興による医療AI開発が今後加速しそうだ。

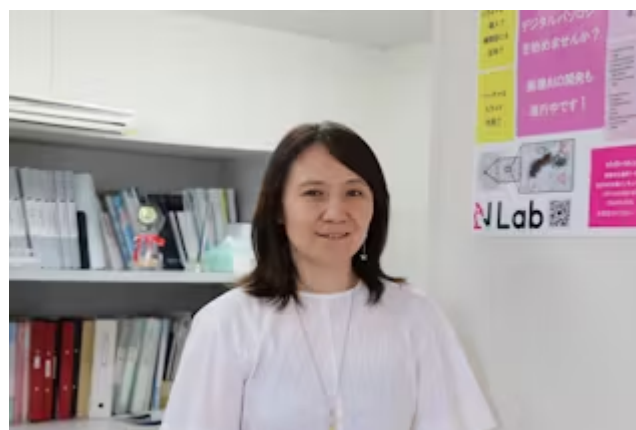
患者から採取した細胞組織を検査して病気かどうか診断する病理医は2025年4月時点で全国に2700人強いる。徐々に増えてはいるものの、高齢化などで検査数も多くなっており、不足気味だ。顕微鏡などを使って人間の目で判定する方法は時間がかかり、初期段階では病気を見逃すリスクもある。



エヌラボが開発した間質性肺炎のAI解析画面（同社提供）

赤、黄、緑、青——。エヌラボやメドメインが開発したシステムでは、異常が疑われる細胞をヒートマップ状に色分けしてモニターに表示する。正常または病気になった組織の画像データを多数学習したAIが数万もの細胞を瞬時に解析する。

エヌラボは、開発に長崎大の強みを生かした。医療のデジタルトランスフォーメーション（DX）などを研究する情報病理学講座の福岡順也教授が12年から病理診断のデジタル化を開始。診断手法がいち早く顕微鏡からデジタル画像に切り替えられていたほか、福岡教授の専門が肺の病理学で、AIに学習させるデータが集まっていた。



エヌラボ（長崎市）の北村由香代表

間質性肺炎は重度の呼吸器疾患で肺の組織が硬くなって縮んでしまう病気だ。場合によっては致死率が高く早急な治療が求められるが、早い段階で病型を見分ける診断が難しいとされている。

エヌラボはAIに予後を含めたデータを学習させて、診断精度を90%以上にまで高めた。同社の北村由香代表は「私たちにしか作れない」と話す。今後、薬事承認申請をめざす考えだ。

現状では日本で病理診断を補助する用途で薬事承認を得たAIはまだない。研究や教育などでの利用に限られている。

メドメインはその第1号となるべく、年内にも薬事承認を申請する見通しだ。同社はAIの学習時間を短縮する独自技術で開発スピードを高め、現在は全身の主要臓器でがんを検出できるようになったという。

大学発の新興企業は年々増加している。経済産業省によると、九州・沖縄の大学発新興企業は24年度時点で342社あり、調査に回答した64社のうち4割が医療関連に取り組む。

九州は医学部と情報・工学系の学部を持つ総合大学も多い。九州経済産業局の担当者は「九州全域で産学官連携は活発化している。今後も革新的な開発などに期待したい」と話した。

(鈴木見優)

すべての記事が読み放題
まずは無料体験（初回1カ月）

有料会員に登録する

有料会員限定

キーワード登録であなたの
**重要なニュースを
ハイライト**



日経電子版 紙面ビューアー